

南船北馬一団

「帰りたいうちに」

作：棚瀬美幸

季節：春

場所：大阪周辺都市の、とある老人性痴呆症のグループホーム

舞台中央にリビング。テーブルと椅子が七脚、その後ろにソファがある。

リビングの横には、柱（大きな木）が二本立っている。

柱の間のリビングの前はグループホームの庭になっていて、鉢植えが何個か置いてある。

リビングの周りには”記憶の森”が広がっている。森には道が何本もあり、交差している。また、空き地があったり段があったりしている。

登場人物：老人女A 直江 一 二役 一 道子の息子嫁

老人女B 幸代 一 二役 一 浜口の娘

老人女C 頼子 一 二役 一 幸代の孫娘

老人女D 道子 一 二役 一 頼子の妹

老人男E 浜口 一 二役 一 直江の息子

介護者女 のりこ

介護者男 森

SCENE・1

椅子に座りテーブルに肘をついて、綾取りをしている人が二人。

男 何でもいいので、聞いてもらえませんか？

女 聞く？

男 質問をして欲しいのです。

女 質問ですか？

男 はい。

女 何でもいいの？

男 お願いします。

女、少し考えて、

女 今は何時ですか？

男 おそらく二時頃です。
女 今日は何月何日ですか？
男 ……
女 何年ですか？
男 ……
女 今日は、二〇〇一年四月二十九日ですよ。大型連休が始まったところです。
男 ゴールデンウィークですか。
女 ええ、そう。
男 それなら、今は春ですね。
女 桜は終わってしまったけどね。
男 そうなんですか。残念だなあ。
女 じゃあ、もう一度聞きます。今日は何年の何月何日ですか？
男 ……
女 ここは何処ですか？
男 ……
女 今、しているのは何ですか？
男 綾取りです。
女 この糸は何ですか？
男 毛糸です。
女 何色ですか？
男 赤色です。
女 赤から連想するものは何ですか？
男 ……いろ、色です。
女 いっぱいありますよね。林檎も唇もそうだし。
男 林檎は赤だけではありません。緑っぱいもあります。
女 それは青林檎ね、酸っぱいやつ。
男 いえ、王林です。
女 ……
男 それに、唇は赤くありません。
女 じゃあ、何色なんですか？
男 ……違います。…赤は赤です。色です。
女 ええ、色ですね。赤は色の一つですもんね。
男 はい。
女 この糸は赤色。今赤い毛糸で綾取りをしています。何人でしているのですか？
男 二人です。あなたと私。
女 あなたは誰ですか？
男 ……
女 幾つですか？
男 ……
女 今まで何をしてきたのですか？

男 ……人間です。
女 私もそうです。私も人間。
男 みたいですね。
女 あなたの家はどこですか？
男 ……ここからは遠いところですか？
女 どのくらい遠いのですか？
男 とつてもです。
女 とつても遠いんですか、それはどこですか？
男 ……どこ、ですか？
女 そう、
男 どこ…
女 教えてもらえませんか？
男 うちですよ？
女 はい。
男 うち…
女 ええ、
男 ……駅から線路沿いに行きます。交番、病院、踏切、花屋と続きます。どうやらその花屋にある花は造花のようです。その先には本屋と定食屋があります。最近、泥棒が多らしく、鍵をかけるよう促す看板がたっています。物騒な世の中になりました。空き地もあります。そこには毎日、大きくなれない大人の人がやってきます。そして、人の住まなくなった家の前を通ると、なくしていたはずの記憶が戻ってきたりもします。そのまま、道なりにゆるく小学校のほうに曲がり、誰かが歌う童謡の聞こえるほうに進みます。立ち止まりたくなったら、訳がなくても止まってみます。そのときすれ違った一人の若い女性の影に、自分の影を重ねることは出来ません。だからこそ、何を思っても許されてしまうのです。風がお好み焼き屋の匂いを運んできたら、十字路は気が向いたら左折して、少しつまずいたりしながら、大きな家の高い塀の下を、仕方なく歩いていくと、上り坂にぶつかります。息が荒くならない程度に上ると、表札が出ています。家族がのんびり机を囲んでいるでしょう。何の話をしているのでしょうか。私はどこに腰を下ろしたらいいのでしょうか。それとも、まだ先へ帰るべきなのですか。もういいかいの返事がかえってくるまで。

男が話している間に、女はいつの間にかいなくなっている。
舞台奥で交差している数本の道を、五人がそれぞれゆっくり歩いてくる。

男 もういいかい。
五人 (口々に) まあだだよ。
男 もういいかい。
五人 まあだだよ。

「もういいかい」「まあだだよ」を繰り返しながら、目に入るものの名を口にす。

五人の口にするそれをつなげると、しりとりになっている。
リビング手前まで歩いてきたところで、立ち止まる。

男 もういいかい。
五人 ……もういいよ。

今まで歩いてきたときには見えなかった顔が、はっきりと見える。
五人それぞれが、違う部分に赤い糸を絡ませている。

男 かくれんぼの主役は私ですね？

男、奥へと続く道の一本を歩いていく。
暗転。

SCENE・2

Cが一人、柱の下に座り、鉢植えに穴を掘っている。
女がやってくる。

女 見つけた。

C、驚く。掘った穴を急いで隠し、顔を上げる。

女 頼子さん、みつけ。

C ……

女 (笑) なんてね。びっくりした？

C 空が青いの。なんで？

女 え？

C 川でも近くにあるの？

女 ……

C 聞こえない？

女 何？

C ほら、誰かが遊んでる。

女 どうしたの？

C ほら、声。聞こえるでしょう？……ほら。

女 ……そう？

C 聞こえないの？

女 どんな声？
C 子供の声。水遊びかなんかしている。
女 え？
C ピチャピチャ、ピチャピチャって。
女 水の音？
C
女 どっかでどこかの子が遊んでるんだ。
C ねえ、行かなくていいの？
女 え？わたし？
C いいよ、行っても。私は一人慣れてるから。行つといでよ。みんなのところに行きた
いんでしょう？
女 どうして？
C どうしてって、
女 一人がいいの？
C いいってわけじゃないけど、いいよ、一人でも。大丈夫。
女 ここに来てほしくなかった？
C え？
女 もしかして、邪魔？
C なんで？
女 なんだか、向こう行つてほしそうだから。
C そんなことないよ。けど、向こう行きたいんでしよう。
女 せっかく頼子さん見つけたのに？
C 遠慮しないでいいんだよ。
女 遠慮？遠慮って何に？
C それとも、迎えに来てくれたの？一緒に遊びにいこうってこと？
女 あ、うん。まあ、そんな感じかな。そう。
C へー、そうだったんだ。
女 何してたの？
C けど私、今ここから離れられないの。
女 そうなの？
C そうなの。ごめんね。せっかく呼びにきてくれたのに。
女 うん、それは別に。(Cの爪に塗られたマニキュアを見て)それって一昨日の色？爪。
C え、違うと思う。
女 新しいやつ？
C かなあ。
女 昨日のオレンジより肌の色に合ってるかも。
C オレンジじゃないよ。
女 そうだっけ？
C うん、昨日は赤。
女 あれ？赤って、普段は塗らないって言ってなかった？

C そんなこと言った？
女 だから、赤は一本しか持ってないって。
C そんなことないよ。だって赤色もたくさん持ってるもん。

C、手に残っていた土をはらう。

女 ……花？

C え？

女 なんの花？

C 花？

女 さつき埋めてなかった？

C ……え、

女 なんかの種なんじゃないの？

C あ、うん……

女 何？

C ……さあ、

女 袋ある？写真なかった？咲いたとこの。

C 花じゃないよ。

女 え、そうなの？

C 違う。何でもない。

女 何でもない？

C ……何でもないの。

女 何でもないもの？

C そう………ねえ、なんでここだって分かったの？

女 テレビのところにベランダにもいなかったから。

C 探したんだ。

女 それほどではないけど。

C ご飯？

女 ご飯はまだだけど。

C まだなのか。

女 もうすぐ作り始める時間やろうけどね。

C そう。

女 お腹空いた？

C うん。

女 頼子さんにしては珍しい。いつも小食なのに。

C だって、全然ご飯食べてないもん。

女 全然？

C 今日起きてからまだ何も食べてない。

女 あれ？頼子さんもさつき、お昼ご飯食べてなかった？

C 食べてない。

女 そう？

C うん、食べてない。ついさっきまではお腹空いてなかったの。

女 なら、あと少ししたらご飯の準備しようか。

C うん。

女 一緒に買いに行ってくれる？

C どうしようかなあ。

女 ついて来てよ。

C うーん、・・・やっぱりやめとく。ねえ、一人で行ってきて。

女 ついて来てくれないの？

C ごめんね。

女、立ち上がる。

女 まだ外にいるんだったら、もう一枚着た方がいいんじゃないの？
C 分かってる。

女、出ていく。

C、ポケットに隠した手鏡を取り出し、掘っていた穴に入れ、土を被せる。

E がもう一つの柱の影にいる。

C、隠し終えると周りを見渡す。

C あ・・・

E こんにちわ。

C そこにいたの？

E こんにちわ。

C 声かけてよ。

E こんにちわ。

C 何してたの？

E あの人が探してましたよ。

C あの人の？

E そう、あの人の。なんだ、あのよく喋る・・・

C そう。

E 「何処に隠れたんよ！」って、すごい大きな声で。

C ふーん、

E みんなに止められてたみたいやけど。行かなくていいの？

C なんで？

E 探してましたよ。

C なんて行かなきゃいけないの？

E ・・・

C いい天気。

E やっぱり似てる。
C お出かけしたいな。
E そっくりだ。そっくりなんです。
C え？
E とつても似てるんですよ、その、あなたに。
C 誰に？
E いやあ、ねえ・・・
C ねえ、誰に似てるの？
E けど、これ言うと怒るかもしれませんし。
C いいから言って。
E 言っていいですか？いいんですね？実は前から言いたくて。なかなか二人つきりになれる時がなかったから。
C あ、声がなくなってる。聞こえない。
E こえ？
C どこ行ったんだろう？
E ・・・・
C 帰っちゃたのかなあ。
E ・・・・なに？
C どうしたの？なんでここににいるの？
E ・・・・いや、
C 何か用事？
E 似てるって言いたくて、
C 似てる？どこが？
E えっと、ほら、その、着るものにこだわるところか、
C 服？
E そう、お洒落なことか、
C 他の人が気使ってないだけよ。私、普通だわ。いつも普段着しか着てないもん。
C、歩き出す。
E どこ行くの？
C どこでもいいでしょう。
C、どっか行ってしまおう。
E、盛り上がっている土を見ている。
B、やってくる。
B なあ、あの子は？
E 知りません。
B ここにいたんやろう。

••••

E どこ行ったの？

B だから知りません。

E どこ行ったんよ。

B 知りませんよ。

E 戻ったんか？

B そうなんじゃないですか。

E ・・・ねえ、あの子何か持ってなかった？

B 何か？

E あの子、勝手に人の部屋入り込んだんよ。

B だから、どっか行きましたよ。

E 鍵かけといたのに。

B だから、行っちゃたんですよ。中に入ったんじゃないですか。

E やろう？そうやろう？なのにあの子、入ったんよ。

B 分からない人だなあ。

E かけたわよ。だってここに鍵持ってるもの。

B ここにいますか？いないじゃないですか。

E もう、どこ行ったのよ。どこに隠れたんよ。絶対見つけてやるんやから。人の部屋勝

B 手に物色するなんて信じられへん。

E 怒らなくてもいいでしょう。知りませんよ。

B 怒るに決まってるやろう。もういい。自分で探す。

B、歩きだそうとしたところに、Aと男がやってくる

奥にDがいる。

E、Dのほうに行く。

男 幸代さん、のりちゃんが呼んでますよ。

A 幸代さん。のりちゃんが。

B テレビの前に行ってって言って。あの子見つけたらすぐ行くから。

男 あの子って頼子さんですか？

B、答えずに行ってしまう。

男 僕ちよつと幸代さん連れてきますね。直江さん、先に中戻っててくれませんか。

A そうなんですか？

男 すぐ行きますから。

A すぐ、

男 はい。だから、のりちゃんや頼子さんのとこにいてください。

男、Bの後を追う。

D ……まだかなあ、もうかなあ、どうかなあ……
E どうしたの？
D どうかなあ、どうかなあ、どうなんだろう、
E 考え事？
D ……
E なに？
D ……まだなのか、もうなのかって。
E 何が？
D こっちからかなあ、あっちからかなあ。
E こっちなんじゃない。
D こっちか、じゃあ、こっちだ。

DとE、歩いていく。

A 戻っててください。戻るとききます。戻ってください。戻ります。はい、すぐ戻ります。

A、来た道の方へ戻っていく。

照明が変わる。

Aがそのまま、奥の道を歩いている。

D、そしてDと同じ道にE、また違う道にBとCが別々に歩いている。
暗転

SCENE・3

リビングに、男とAとBがいる。

A うちの部屋に雀が迷いこんできたみたいだね、ピーチクパーチク鳴いてるんです。
男 雀ですか？

A 雀です。そう、雀、雀。何言ってるのか全然分からないので、何って聞いているんです
けど、パタパタパタパタ動くだけで、

B 雀が入るわけがないやないの。

A でも、ホンマなんやもの。(男に) ホンマなのよ、
男 ええ、

A 可愛いだよ、とても。とても可愛いんだけどね、
男 今もいるんですか？

A 見に来ますか？
男 いいんですか？
B 雀がバタバタしたりピチクパチク言うわけないやんか。
A 来て下さい。ちよつとちよつと来て下さい。あ、散らかしてるので、少し片付けてからで、すいませんねー。
B 雀で、雀やんか、何言うてんの。
男 まだいるんですよね。
A まだいるんやと思います。まだまだまだ、
B バタバタしたりピチクパチクなんてアホらしい。
A まだいてると、今朝出てったんかもしれないんですけどね、
B チュンチュンやろ、雀は。
男 雀は人になつかないのに、入り込んでくるなんて不思議ですねー。
A 不思議なんです。はい。
B 雀で、雀やろ？
A (男に) 見にきますか？
B 見てみたいわ。
A あなたも見たいの？
B 別に、見たくないわ。
男 網戸なんか窓につけましょうか？窓開けてたら何か入り込んでくるかもしれませんもんね。
B いらんよ、
男 出窓だし、広く開く窓じゃないので、必要ないと思ってたんですけど、
B いらんよ、
男 そうですか、
A 何か入り込んでくるかもしれませんねえ。
B 雀がくるかいな。
A 雀入り込みますからねえ、
B ドアにつけてほしいわ。
男 ドアに網戸ですか？
B 入り込んでくるやつがいるから。
男 ドアには鍵がついてるじゃないですか。
A そう、窓もドアも鍵があれば、
男 鍵はありますからねー、
A 鍵ありますもんね。
男 今度、部屋見せてもらってもいいですか？
A 是非、今度でなくて今すぐになでも。
男 何かいるものがあつたら、買いに行きましょう。
A ええ、買いにいきましょう。
男 幸代さんも欲しいものあつたら一緒に。
B 欲しいもんなんて贅沢言えるかいな。なくなったもんぐらいやわ、欲しいんわ。

男 お茶でも飲みますか？
A はい。

男 幸代さんは、お茶どうです？

B 知らないことないです。

男 飲みますよね？

B ください。

A 手伝いましょうか。

男 じゃあ、一緒に。

男とA、出て行く。

B チュンチュンやろ。ピクパクなんてアホらしい、

C がやってくる。

B どこ行くん？

C ……

B どこ行くんって言うてんの。

C なんで？

B なんでって何。

C どこでもいいでしょう。

B よくないやんか。

C どうして？

B あんたの部屋、そっちゃないやろ。

C え？

B どこ行くのって。

C やな奴。

B やな奴？

C ……

B 今、やな奴って言うたん？

C ……(去ろうとする)

B ちょっと待ちーや。

C、嫌々足を止める。

B 誰がやな奴なんよ。

C ……

B なあ。

A、戻ってくる。

- B ここ、座り。
A どうしたの？
B 座り、言うてるの。
A (Cに)座りなさいやて。

C、チラッとAを見る。そして、イスの後ろまで来る。

- B どこ行くつもりやったん。
C
B なあ、どこ行くつもりやったん。
C きらい。
B 答えなさいよ。

男、戻ってくる。

- B うちの部屋でも行くつもりやったんやろ。
C
男 なにかあったんですか？
B なあ。
男 お茶できましたよ。頼子さんも飲みませんか。
C
男 幸代さん、どうしたんです？良かったらお茶分けてもらうの手伝ってもらえませんか？
B 後でやります。
男 後だと、お茶苦くなってしまうよ。
B お願いします。
男 手伝ってもらえないんですか？
A 私やりましょうか。
男 じゃあ、いいですか？幸代さん、直江さんは手伝ってくれますよ。
A いますよね？
C
A 頼子さんの分も湯のみ取ってきてもらってもいいですか？
A はい。

A、とりに行こうとする。

- A 行きます、行きます。取りにですよ、行きますよ。 . . . もう一つですよ？えっ
と、何をでした？
男 頼子さんの湯のみ、いいです？
A はいはい、分かっていますよ。湯のみですね、湯のみ。

A、出ていく。

男 幸代さん、どうしたんです？

B どうもこうもあるかいな。

男 何があっただんですか？

B この子ったらまた、うちの部屋に入ろうとしてたんよ。性懲りもなく、一日に何度も。

C うるさい人。

B なあ、今度は何が欲しかったん？うちの部屋の何が欲しかったんよ。金か、金が欲しいんか、

男 幸代さん、落ち着いて下さい。

B 落ち着いてなんかおれるかいな。この子の顔見ていると、落ち着きなんかどっか行っ
てまうわ。

男 そんな喧嘩腰にならんと。まずはお茶でも飲んで一服しましょうよ。

男、お茶を注いだ湯のみをBの前に置く。

男 はい。

B

男 頼子さんの分も、ここ置きますね。

C 遠い、

男 頼子さん。頼子さんはさっきまで自分の部屋にいたんですよね？

C はい。

男 で、ここへ来たんですよね？

C そう。

男 じゃあ、一緒に座りましょうよ。ねえ。

男、Cの肩を持ち、座らせる。

男 どうぞ。

C、仕方なく座る。

A、戻ってきてその様子を見ている。

男 幸代さん、頼子さんはここへ来たかったただけですよ。みんなと話をしにきたんですよ。
幸代さんの部屋に行こうとしたわけじゃありませんから。

B じゃあ、どうしてうちの部屋の前におったん？

男 頼子さん、向こうまで行ってたんですか。

C 行っていない。

B 嘘つき。うちの部屋のドア開けようとしてたやんか。

男 そんなことないでしょう。頼子さんはここに来たんですから。ねえ？
C 行っていない。

男 ほら、頼子さんもそう言うてますし。大丈夫。誰も幸代さんの部屋に入っていない
から。

B 信じられへんわ。

男 それに、ついさつき鍵掛かっているの確認したでしょう？

B でも、ホンマに扉の前に、

男 大丈夫ですよ。

C 私本当に何もしてないのに。

男 頼子さん、

B あんた、ホンマにうちのもん何も取ってへんやろうな。指輪が二個とネックレスが一
本に、ブローチ二個。他にも手鏡や小物が見あたりへんのよ。いつも置く場所決めてん
のに。

男 どっかに他のところにしまっていたりしてませんか？

B どこ探してもないんよ。

男 大切なものだからって、わざと奥に隠したりすることあるでしょう？

B そんなこと絶対せーへん。うち、鏡の角度が少し違ってだけでも気づくんよ。置いて
るもんが少しでも変わってたら、気になってしゃあないんやから。

男 大丈夫ですよ。何も変わってなんていませんから。いつも通りの幸代さんの部屋のま
まですよ。なんなら、一緒に調べに行きましようか？

B いい。自分で見てくる。今度また、入ったあとがあったら承知せーへんからな。

B、出ていく。

男 幸代さん、気立ってるみたいですねえ。

A ホンマはどこ、行こうとしてたん？

C え？

A 向こう行こうとしてたやろ？

男 直江さんも、もういいじゃないですか。

A だって、気になるやもん。昼間の事もあるし。この人、人の物取ったりするのなんとも
思っていないみたいやし。

男 直江さんらしくない、人のこと悪く言うなんて。

A だって、ホンマのことやもん。

C 私、人の物とったりなんてしたことない。

A ずうずうしい女。

男 やめましようよ。いいじゃないですか。今は特別誰かのものがなくなってるわけじゃ
ないんですから。さあ、直江さんも座ってお茶でも飲みましようよ。ねえ？温まります
よ。ほら。

A、男の近くに座る。

A なら、あなたの分もいれますね。

男 いいですか？

A あ、お湯がもうない。(Cに) ねえ、ちょっとお湯いれてきて。

C わたし？

A そう、あんた以外にここに人がいて？

男 僕がいられますよ。

A いいのよ、あなたは。座ってなさい。ねえ、あんたがいられてきて頂戴。

C、立ち上がってどつかへ行ってしまおう。

A もう、お急須も持たずにどこ行くのよ。

男、Cの行き先を追っている。

A あなた。

男 直江さん、今のはちょっと言い方がきつくありませんか？

A あなた。

男 頼子さん行っちゃいましたよ。

A あなたったら。

男 どうしたんです？

A ねえ、いい加減にしてちょうだい。

男 ……？

A もう他の女のことなんてどうでもいいでしょう。これ以上他の女を追いかけるのは止めて下さいな。

男 ……

A あなたには私がいるじゃないですか。

男 何の話ですか？

A 私は今までずっとあなたの側にいてきたんですよ。

男 ……はい、

A あなたの側にいるのは私なんです。他の人なんてどうでもいいでしょう。

男 直江さん、

A なんですか？

男 直江さんのこと大事に思ってますよ。それはそうなんですけど、

A なら、それでいいじゃありませんか。それ以上何にも聞きたくありません。聞かない方がいいことだって、いっぱいあるんです。

女とDが帰ってくる。

女 ただいま。

D ただいま、おかえりなさい、ただいま。
A 先に部屋に入らせてもらってますね。
女 直江さん、ただいま。

A、出ていく。

男 おかえりなさい。浜口さんは？

女 ああ、家族に先に連絡していたみたいで、来るって言ってるらしいから。

男 そうなんだ、

女 待つてようかとも思ったんだけど、

男 警察の人が見ててくれるんでしょう？

女 それに、道子さん、早く帰りましたそうだったし。

D そうなの、かなり歩いたの。もうどこがどこだか分からなくなるほど遠くまで。

男 でも、良かったですね。帰ってこれて。

D こっちだよお、こっちだよお、って言うから。

女 バスの道沿いはずっと、向こうの市との境になってる、ほら何川だっけ？とにかくその川のところまで行ってみたい。

D 行き止まりだったの。川？ 渡れないの。それでもこっちだよおって手引くから。

男 浜口さんが手引いてくれたの？

D え？

男 浜口さん。一緒に歩いてた男の人。

D 手痛かった。だってずっと引張るんだもん。

女 浜口さんが言うにはね、どっちって聞くから、こっちって答えただけだって言うんだけどね。

男 どこか行きたかったの？

D どこか？・・・どこかどこか、

男 どっか出掛けたいところでもあったの？

D 出掛けたいと・・・そうじゃない、そうじゃない。お迎えにいったの。お迎え。そう、お出迎え。もうお父さんが来るって約束した日になったから。連れに来るって約束した日。お父さん早く迎えに行こうと。道、道全然知らない。どっちって。どっちって。こっただよおって。こっち行ってみたけど、お父さん会えない。こっちじゃない。どっち？どっち？あっち？こっち？

女 そのうちに迷子になっちゃたんだ。

D そうか、迷子・・・どうしよう、

男 道子さん、疲れたでしょう？

D 疲れた？うん、疲れた・・・迷子、来れない、疲れた、来れない、

男 もう家についてるから、安心だよ。迷子じゃないよ。

D ううん、迷子。

男 お家にいるのに迷子なの？

D 迷子、迷子・・・どこ？どこ？

男 ここはお家だよ、道子さんのおうち。

D おうち来れない、来れないよ、お父さん迷子、

男 お父さん迷子？

D どうしよう・・・どこ？どこ？

女 お父さん来るの、今日じゃないよ。だから大丈夫。迷子になってないよ。

D うそ？今日じゃない、今日じゃない？まだ？まだなの？

女 明日だったと思うよ。(男に) ねえ、道子さんのお父さん来るの明日だって言ってたよ。

男 休みの日になって言ってたから。明日じゃないかなあ。

D なんだ、そうか、明日か、明日か、なんだそうか、

D、出ていこうとする。

女 休むの？

D 明日になるの待とうかなあ、待てるかなあ、待つよ、待つ。

D、出ていく。

女 他の人は？

男 自分の部屋にいる。さっきまではここにいたんだけど。

女 そう、

男 まあ、見つかってよかったよ。

女 うん、

男 ご飯は済ませたの？

女 近くのお店で食べてきた。

男 道子さんと浜口さんも？

女 うん、三人で。

男 そう、

女 こっちは？

男 いる人で何か作っても良かったんだけど、出前にした。

女・・・他の人、心配してた？

男 まあね。けど、連絡が来てからはいつもと変わらない感じで。

女 そう、なら、良かった。

男 一時間ほど前に、前田さんに連絡とれたから。報告しておいたよ。

女 何か言ってた？

男 今すぐ行くこうかっていってくれたけど、もう見つかったじゃない？だから大丈夫です。すからって言っておいた。

女 今日はもう来ないって？

男 前田さんとお母さん風邪引いてるらしくて、明日いつもより早くには来るって。

女 前田さんって明日何時からだっけ？

男 九時かな。
女 九時か、
男 一度三人で話ししれないといけないね。
女 そうね、

女、テーブルに肘をつき、目に手を当てる。

男 ……疲れた？

女 え？ああ、ちよつと、

男 大丈夫？

女 いや、うん、ごめん。

男 少しだけでも休んでくる？僕、まだここにいるし。

女 ああ、

男 一人になると、ゆつくりも出来ないでしょう？

女 浜口さんが帰ってきたら、呼んでくれる？スタッフ室にいるから。

男 うん、もちろん。

女 じゃあ、ちよつとお願いね。

男 ああ、

女、出ていく。

男、お茶を飲む。

Eが柱の近くの空き地にいる。鉢植えを見ている。

E 今日、駅まであいつを送りに行ったときにな、ほらなんだ、紫と黄色と白の……そう、三色スミレ。それが玄関の回りいっぱいぐるっと植えてるお宅があったんだよ。……そう、三輪車が一台ある家。……菓屋の隣りの隣りの……表札まで見てないから分からないよ。……お前知り合いなのか？

リビングに、Dが出てくる。

男 どうしたんです？

D ……

男 どうかしたんですか？

D ……お父さん、……お父さん、

男 お父さん、来るのは明日ですよ。

D ……探さないと、……探さないと、

男 今日は来ませんよ。

D 迷子、大変、迷子、大変、

男 迷子になんかなくてませんよ。大丈夫ですから。道子さんもお茶のみますか？そうし

たら、少し落ち着くかもしれませんよ。

D

男 お茶いれてきますから、少し座って待っててください。

男、湯のみと急須を持って出ていく。

D、少し立ちつくしているが、また歩いていってしまう。

Eの話はまだ続いている。

E . . . とにかくその三輪車のお宅のな、玄関のスマレがすごかっただよ。 . . . 紫、黄色、白って まあな、三輪車が二台もあるぐらいなんだから、若い夫婦なんだろうけど、 けどいいじゃないか、うちだって、まだご隠居って年でもないんだから。 紫一色よりなあ、明るいだろ？あいつも今度帰ってきた時驚くんじやないか、お母さんどうしたの？って。 一年草？ ああ、毎年 それは面倒だな。 これもスマレなんだろ？ そうだよな、毎年ほっといても咲いてるもんなあ ああ、ごめん、手入れしてるとこ見た事なかったし。 最近は休みの日家にいるじゃないか。 ちゃんと休みとれるようになったんだから。 なあ、お前最近どうして服の色変えたんだ？ いや、ピンクも似合うけどさあ 年とともに若い子みたいな服になってるような気がして

CがEの後ろの道から出てくる。

E おい、どこか出かけるのか？なあ、

E、Cを追いかけて奥へと続く道に行く。

Dが逆の道を歩いている。

D (Eを見つけて、) お父さん。

E、振り返る。

D お父さん。

E、Dの方へ行こうとする。

Eの娘 お父さん。

E、立ち止まる。いつのまにか逆の空き地に女とEの娘が立っている。

女 道子さん、どっか出かけたの？出かけるなら、明日の朝にしない？もう、夜だから道暗くなってるし。

D、うなづく。

女 リビングに森さんいると思うから、明日どこ行くか相談しておいたら？

D、帰っていく。

娘 お父さん、部屋で待ってて言ったでしょう。

女 浜口さん、お庭が好きなんですよ。(Eに) お花の様子見に来たんでしょう？

娘 そうなの？

E ああ、

女 浜口さんが育ててるスマレ、綺麗に咲いてるもんねえ。浜口さん、お花に毎日水やっ
てくれるんですよ。

娘 また明日にしましょうよ。お父さん、花は夜水やっちゃいけないですよ。朝あげな
いと、根が腐っちゃうわよ。

E、出ていく。

女 浜口さん、帰ったら手洗って下さいね。

娘 ほんとすいません。今日は父が迷惑ばかりかけてしまつて。

女 そんなこと、

娘 家にいるときは、そんな出歩くような人じゃなかったんですけど、

女 いえ、ついて行って行ってくれたみたいなんですよ、今日は。外に行こうとしていた女の
人がいたので。

娘 歩くようになってくれたのは、良かったと思ってるんですけど、すいません。

女 浜口さん、みんなと仲良くやってくれてるから助かってるんですよ。ほら、お花の世

話もしてくれるし。

娘 母が花好きだったんです。けど、母が生きてるうちは何もしなかったんですけどねえ、

女 思い出があるんじゃないですか？

娘 母が亡くなって一年ほどしてからなんです、父が花をよく見るようになったのは。

女 花が好きな人に悪い人はいないって言いますし。

娘 と言っても、見るのはスマレばかりで。他にもツツジとか紫陽花とかあったのに。

女 好きなんですねえ。

娘 けど、今のようになってからは花を見てるのかただボーっとしてるのか、分からな
かったんですけど。

女 今は本当、よくやってくれてますよ。

娘 ありがとうございます。

女 自分で手をかけてるものがあるって、生き甲斐にもなりますしね。

娘 ここにはお世話になりっぱなしで。私が一緒にいれたら良かったんですけど、仕
事もありませんし、子供もまだ中学なので。

女 そんな気になさらないで下さい。
娘 せめて週に一回ぐらいは様子を見にこようとは思ってるんですけど、
女 浜口さんとこは多い方ですよ。月に二、三回は会いに来てくださるし。わざわざその
為に大阪に来られたんですから。
娘 父の親戚がこっちに多いんです。幼いころは父も大阪に住んでいたこともあるって聞
いてますから。この方が父も親戚が面会に来やすいので嬉しいかと。
女 お仕事変わるの大変だったんじゃないんですか。
娘 うちにご存知の通り主人がいませんので、仕事と言っても私がなんとかしなければい
けで、営業所が大阪にもあるので、私の方は。
女 大阪にはなじめました？
娘 ええ、もう四ヶ月ほどになりますし。
女 もしよろしかったら、浜口さんの部屋に行きませんか？立話しもなんですから。
娘 はい。

女と娘、出ていく。

SCENE・4

リビングに、男とAとCとDとEがいる。
折り紙でチェーンをつくっている。

D 緑、赤、青、紫、黄色、緑、赤、青、紫、黄色、緑・・・

A 何がかを一生懸命探している。

E 煙草もらえませんか、煙草。

男 煙草ですか？

E ここに出しておいたのになくなっていくんです。

男 浜口さん、もう煙草は吸わないって言ってませんでした？

E そんな事言いません。

男 何年か前にやめたって娘さんからも聞いてますよ。

E あなたが取ったんですか？

男 僕は煙草は吸いませんよ。

A (男に) ねえ、ないの。

男 探しものですか？

A さっきまであったんですよ、さっきまで。

男 何を探してるんです？

A そう、探してるの。さっきまであったんだから。ごめんなさいね。どうしよう？
E ポケットに入れてたマツチまでなくなってる。

E、ポケットの中の丸まったティッシュなどを机の上に出している。

C きたない人。

E なんでマツチも煙草もないんだ。

A やっぱりないわ。これじゃあ、作れない。どうしよう。

男 隳なら、ここにありますよ。

A 隳じゃないの。隳じゃないのよ。

C あら？・・・ピンク。ピンク、ピンク。

男 ピンクはないので、赤でいいですか。

C ダメよ。ピンクじゃないと。

男 切ったらまだありますから、もう少し待ってください。

C ないの？ピンクは。

男 紫はどうですか？綺麗な色ですよ。（紫の折り紙を渡す）

C うーん、・・・あげる。

C、紫の紙をDに渡し、出ていってしまう。

D 何色？紫？紫？・・・紫じゃない、緑。

E (Dに) 煙草知らないですか？

D 緑、緑、緑、緑、

E 煙草です。

D (必死に) 緑、緑、緑、緑、

E 煙草です。

A あなた、ここは禁煙ですよ。

E 禁煙？

A そう、禁煙です。煙草は吸ってはいけません。

E 誰がそんなこと決めたんですか？

男 直江さん、折り紙切ってもらえませんか？ピンクがもうないみたいです。

A けど私、これをくつつけようと、だけど、なくて、くつつけるのなくて、

男 のりでくつつけるのは、他の人がやってくれてるので、直江さんは切ってもらえませんか？

A 私だけ切るの？

男 隳使えるの、直江さんだけなんですよ。

A だけど、私、今までくつつけるのやってみましたし。

男 直江さん、さっきまで切ってくれましたよ。

A 切ってませんよ。私、くつつけるのやりたいんです。

男 直江さん、一番上手だから、こんな上手に折り紙を切れるのは直江さんぐらいなんです。

す。お願いできませんか？

A そうなの？

男 お願いします。

A あなたがそこまで言うなら。やります。私切るのやります。

女とBとCがやってくる。Bがクッキーを盛った皿を持っている。Cは一枚食べている。

女 どうです、進んでますか？

男 ええ、

E すいません、煙草もらえませんか、なくなっただんです。

女 煙草吸いたいですか？

E ないですか？

女 たぶん、私のがスタッフ室にあったと思うので、持ってきますね。少し待ってもらえませんか？

D なんか匂う、なんか匂うよ。なんだろう。

E そうですか。

女 ほら、こんなに上手に焼けましたよ。

男 おいしそうじゃないですか。

D なんだ、それは、なんだ、お菓子か、お菓子か。

女 幸代さんが焼いてくれたのよ。ねえ。

B 好きなんよ。おいしいかどうかは知らんよ、私は。

女 あら、おいしかったわよ。頼子さん、どう？おいしいでしょう？

C 太っちゃう。

D 太るの？太るの？あなた太るの？太ってるの？

C 太ってない。

女 みなさんも少しどうですか？

B 一枚ずつやで。

女 少ししかないですけど。

B あげる分なくなっただけやろ。

女 大丈夫ですよ、前田さんの分は向こうにとってありますから。

B そうか？それならいいんよ。それなら。

D 一枚食べてみたいかなあ、うん、食べてみたい、一枚？ううん、二枚、ううん、もっともつと。

B あかんよ。あんたあかんよ。

男 ちよっと休憩しましょうか？

A 休みですか？

男 そうしませんか？

A 切るのもお休みですか？

男 ええ、手洗ってくださいようよ。

- A 分かりました。
- 男 浜口さんも道子さんも手洗いにいきますよ。
- D おてて？おてて洗うのね。
- 男 そうですよ。
- E 休憩ということは煙草吸えるということですね？
- 女 ええ、持ってきますね、煙草。
- E ありがとうございます。

男とAとDとE、出ていく。

女、机の上を片付けている。

C、もう一枚とろうとする。

- B あんたはもう食べたやろ。
- C 食べてない。
- B さつき食べてたやないの。
- 女 頼子さん、みんなが来てから一緒に食べましょうね。
- B なくなってるまうわ。せっかくあげようと思てつくったのに。
- 女 前田さん、びっくりするやろうね。
- B 喜んでくれるかな、
- 女 大喜びやと思いますよ。こんなおいしいクッキーを作ってくれるわ、飾り付けしてくれてるわで。泣いてしまうはるかも。
- B そんなたいそうな。
- C あ、ピンクある。なに、ピンクあるじゃないの。
- 女 前田さん、いくつになるか知ってる？
- B 知らん。
- 女 頼子さんは？知ってる？
- C 何を？
- 女 前田さんの年。
- C 年？
- B いくつなん？
- C 三十？
- 女 (笑) それ聞いたら前田さん、大笑いするんやない？
- B いくつなんよ。
- 女 もつと上。
- B いくつより？
- 女 三十よりずっと上。
- C 四十？
- 女 おしい、あとちょっと。
- C わかんない。
- B 三十五？

女 幸代さん、三十五は四十より下よ。
B そう？
女 四十四歳。前田さん明日で四十四。
B なんや、そんなに年寄りやったんか。
女 幸代さんたちに年寄り言われたらなあ、(笑)
B うちと変わらんやないの。
女 そうやね、私からしたら、一緒かな。みんな大先輩。
B ちよっと、そんな年寄り扱いせんといて。
女 幸代さん、自分がいくつか覚えてる？
B ……四十二かなあ、
女 あらー、いつのまにそんな若くなりはったん？

D が戻ってくる。

D いっぱい、いっぱい。誰の分だ？誰の分だ？私の分か？私の分だ。
女 道子さんの分はこっちよ。台所にあった分でしょう。あれは前田さんの分。前田さん、分かる？
B あつちのは、あんたの分とちやうで。
D 前田さん？私のじゃないのか。なんだ、なんだ、じゃあ誰の分だ？
女 前田さん、この一番偉い人よ。ほら、ちよっとぼっちやりした、
D ぼっちやり？太ってる、太ってる？
女 うーん……私よりちよっと、かな。

男とAとEが戻ってくる。

A 誰がつくったん？あのクッキー。
男 幸代さんですよ。
A 誰？
男 幸代さん。(Bに) 上手く焼けてますねえ、
B たまたまや、たまたま。
A あなたがつくったの？
B こっちに、みんなの分あるから食べてみて。
A ありがとう。
女 頼子さんも折り紙やめにして、クッキー頂きましょうよ。
C そうなの？
女 みんな揃いましたよ。
C でも、私これやりたいの。
女 そんなこと言わないで。
C だから、これやるわ。みんなはみんなで作ってて。
男 頼子さん、けどみんなで机囲むのに、一人だけ折り紙なんてねえ。

C じゃあ私、こっち行く。それでいいでしょう。

C、ソファーに折り紙を持っていく。

- D いらないの？いらないの？おいしそうだよ。
- A いただきます。(一枚取る)
- B いいやないの、いらん人は。
- D (Cに) お菓子だよ、お菓子みたいだよ、お菓子だと思うよ。
- C うるさいなあ。
- B 食べんとき。一生、食べんとき。
- 男 幸代さん、もらいますね。
- A もらいましょう、もらいましょう。もらってます。
- E あの、すみません、僕煙草を、
- 女 どうしました？浜口さん何か、
- E いや、あの、
- 女 クッキー焼き立てでおいしいですよ。
- E クッキー、ですか、
- 女 ええ、お一つどうぞ。(渡す)
- E ……はい、
- 男 台所のは全部、前田さんへのプレゼントですか？
- 女 (Bに) そのために作ったんですもんねえ。
- 男 あんなにたくさんあげたら、前田さんに太れちゃって言うような感じですね。
- 女 そういえば、前田さん最近体重増えすぎだとか言ってたかも。
- D 甘い、甘い。苦い？酸っぱい？ううん、甘い。
- 女 (Dに) 甘くておいしいのよね。
- D ん？甘い？おいしい？どっち？…うん、甘い。
- A (男に) ねえ、今度私がお菓子つくってあげますからね。
- 男 直江さんもお菓子つくれるんですか？
- A ええ、当然でしょう。これよりもっとおいしいのを作れるんやから。
- 女 あら、そんなこと言ったら、これがおいしくないみたいじゃないですか。(Bに) ねえ。
- A だって、私を作る方がもっとおいしいもの。
- 女 直江さんったら。
- A (男に) ホンマなのよ、ホンマなんやから。
- 男 はい。また今度、お願いします。
- B 今度なんて言わんと、今作ってや。比べてみたらええんちゃうの。
- 男 幸代さんもそんな意地悪言わないでください。直江さん、妬いてるんですよ、幸代さんがクッキーつくるの上手やから。
- A あなた、何言ってるの。私妬いてなんていませんよ。
- B うちが作ったんがおいしくない言いたいん？

A 誰もそんなこと言ってませんよ。私の方がもっと上手に作れる言うだけです。
女 喉乾きますねえ、紅茶でもいれてきますか？
男 直江さん、一緒に紅茶いれにいきませんか。
A 私いません。

男 ねえ、そんなこと言わずに。

A 紅茶ぐらい自分でいれたらどうなんです。いつも私に何もかも頼まずに。

D 甘い、甘い、もう一個、甘いのもう一個。

B 甘い甘い、うるさいなあ。甘すぎるって言いたいんか。

女 道子さんは、甘くておいしい言ってるんですよ。

B なら、黙つとき。もの食べながら喋るなんて行儀悪い。

E あの、落ち着かないんです。さつきから落ち着かないんです。

男 どうしたんですか？

E さつきから落ち着かなくて、だから、だから、

女 ああ、煙草でしたね。ごめんさい。今取って来ますね。

A ここは煙草禁止ですよ。

男 いいじゃありませんか。少しぐらい。

A いけません。空気は汚くなるは、匂いはつくは、体には悪いはで、いいことなんて少しもないじゃありませんか。

女 そうですね、いつもはみんな煙草吸いしませんもんね。(Eに) じゃあ、スタッフ室で。

E あそこは私も吸ってるので、禁煙じゃありませんから。
はい。

女とE出ていく。

C どうして男の人は煙草なんて吸うのかしら。

男 浜口さん、本当は煙草やめたはずなんですけどねえ。

D お腹いっぱいかな？空いてるかな？まだ空いてる。まだ食べれる。まだ食べたいな。

B あんたはいっぱい食べたやろ。

C 私知らないから、食べて。

D いいの？いいの？

B なんてあんたが答えるんよ。これはあんたのもんか？あんたが作ったんか？

男 幸代さん、

B あんたが作ったんとかやうやろ。ちやうんやから勝手に返事せんといて。

A そないにたいそうに言わんでもいいんとかやうの。

B これはうちのもんなんやから、うちが作ったんやから。もう片付けるで。向こう持つてくんやから。ほら、この机の上のもんも綺麗にし。ちらかったままにせんといて。

C、持っていた折り紙などを投げる。

C やな人。

B あんた、何すんの。
C 片付けたいんでしよう？

C、出ていく。

男 頼子さん！

男、Cを呼びとめようとする。

D 帰らなきや。おうち帰らなきや。おうち帰らなきや。

男 道子さん、おトイレですか？

D おうち、おうち、

男 トイレなんですか？おしっこしたいの？

D ううん、おうち、おうち、

男 行きましよう、トイレ行きましようね。

D おうち、おうち、

A 私も帰る支度してきます。

男 直江さん？

D おうち、おうち、

男 トイレ、こつちですよ。

D おうち、すぐ、すぐ、

A (男に) あなた。あなたも、荷物まとめておいてくださいね。

男 荷物ですか？

A はい、

A、出ていく。

D 帰らなきや、すぐ、すぐ、帰らなきや。

男 さあ、トイレ行きましようね。まだ大丈夫ですか。大丈夫ですか？

D おうち、おうち、

男 あと少しですからね。

男とD出ていく。

Bが一人、取り残される。

B なんてこんなに食べもん残すんよ。食べもん粗末にしたらバチ当たるんやで。米粒ひとつかてな、昔は残したら、外に追い出されたんやから。お百姓さんやなあ、作ったものの気持ちを考えなさいっていつも言うてるやろ。部屋かてこないに散らかしてからに。ぐちゃぐちゃややないの。もう、やったもんは出しっぱなしやし。ちゃんと片付け。なんなんよ、この様は。なあ。

B、片付けようとするのだが、逆に散らかっていくばかり。

B ちゃんと片付け言うてるやろ。使ったもんは元のところに戻し。少しでも場所が違ってたら、うち気になってしゃあないんやから。元に戻しいつも言てるやろ。もう、どこにあったんよ。こんなにごちゃごちゃやったら、分からんやないの。もう、何遍言うたら分かるんよ。出しっぱなしにしないの。気なって寝られへん言うてるやろ。

Bの孫娘が道にいる。

孫娘 おばあちゃん。

B なんで片付けんとどつか行くの。片付けてから次のことしなさい言うてるのに。

孫娘 なあ、おばあちゃん。

B あんたか、あんたがこんな散らかしたんか。

孫娘 おばあちゃん。もうやめて。

B 片付け言うてるやろ。

孫娘 なんでそんなに散らかすの。

B しまってるんやんか。元の場所にしまおうとしてるんやろ。

孫娘 おばあちゃん、やめてよ。もうこれ以上散らかさんというて。

B 誰が散らかしてるんや。あんたらが片付けもせんと出ていくから、うちが片付けてやってるんやないの。何その口のきき方は。

孫娘 おばあちゃん、私が片付けるから。

B あんたに片付けなんかできへんやないの。元の場所も覚えてへんくせに。ああ、もう余計散らかってきた。どないしたらええねん。

Aが大きな荷物を持って、リビングを通過していく。

孫娘 だから、やめてって。

B (初めて孫の顔をみる).....

孫娘 お父さん見たらまた怒るで。また部屋ぐちゃぐちゃにしてって。だから、もう落ちて置いて。後は私がやるから。おばあちゃんは自分の部屋に戻っというてよ、お願いやから。

Bうちか？うちがやった言うんか。

孫娘 おばあちゃんしかここにおらんやないの。私だって今帰ってきたばかりなんやから。

Bうちか？うちなんか？

孫娘 もういいから。分かったから。おばあちゃんは片付けようとしとったんやろ、そやろ？そんで片付け方が分からなくなったんやろ？分かったから、おばあちゃんの気持ち分かっているから。

B うちはまだ片付けようと.....

孫娘 いいんやって。もういいから。だから、おばあちゃんはもう部屋で寝といてや。静かにしといて。私がやとくから。お父さんが帰って来る前に片付けとくから。おばあ

ちゃんだって、もう昨日みたいにお父さんに怒られるの嫌やろ？私ももう見たないんよ。もう嫌なんよ。

B

孫娘 ね、だから、お願い。お願いだから、部屋に行つて。

Bうちはただ

孫娘 おばあちゃん、ゆつくり休み。気が立ってるんやわ、きつと。ゆつくり寝たら落ちて着くから、なあ。

B片付けようと思ったんよ。せやのにどれがどこにあったんか分からんようになってしまつて

孫娘 分かつたから、もう分かつたから。お願い。私だつて今日はお葬式やバイトで疲れてるんやから。お願いやから言う通りにして。

B お葬式？バイト？

孫娘 バイト先の友達が事故つたんよ。その子のお葬式。私と二つしか違わへんかつたのに、なんでそんな若いのになあ、お願い。おばあちゃん、私一人になりたいの。ちゃんと片付けるから、部屋で静かにしてて。分かつた？

B、うなづく。

孫娘 もう嫌やわ、何もかも

B なあ、うち

リビングに女がやつてくる。

孫娘 触らんといてよ。いい？後で私が片付けてあげるから。

孫娘、出ていく。

女 幸代さん？

B、返事もせずに出ていく。

女、Bの後姿を見た後、片付け出す。

男が出てくる。

男 お疲れ。

女 お疲れ様。

男 すごい散らかりようですね。

女 ホンマに。

男 浜口さんは？

女 スタッフ室で寝てる。煙草一口吸つたとたん、ちよつと眠い言うて。

男 みんなと長く居すぎだったんかなあ。

女 最近、少し不安定みたいやったから。頼子さんたちは？

男 頼子さんと直江さんは部屋に戻ってます。道子さんとトイレ行ってたんで、幸代さんはここにいますかと。

女 幸代さんは、さっきまでここにいたみたいよ。直江さん、森さんのこと探してたみたいやけど、会った？

男 直江さん？部屋やないんですか？

女 さっき、スタッフ室覗きにきたわよ。

男 ああ、トイレ入ってるとき、じゃあ、直江さんは？

女 さあ、

男 また戻ったのかな。

女 幸代さん、何かあったの？

男 え、幸代さんですか、

女 一人でいたとき、ちよっと様子がね、

男 ああ、ちよっと・・・けどいつもの事ですよ。

女 春って季節柄、鬱になりやすいから、ちゃんと見てあげないと。

男 そうなのって、あまり関係ないんじゃないですかねえ。

女 今度先生が来るの、いつだって言ってた？

男 ああ、確か次は水曜日だったかな。

女 連休やもんね。少し先になるよね。

男 ちよっと部屋行ってきますね。

A が奥の道にある段に座っている。

A の息子が来る。

息子 やっぱり、

A

息子 母さん、帰るよ。

A

息子 人に見られたらどうするの。

A 構わないじゃない。

息子 嫌だよ、さあ、行くよ。

A 絶対ここに来るんだから、ここに、ここに、ここに、絶対に、絶対に。

男がリビングに戻ってくる。

男 直江さん、部屋にいないみたい。ノックしても出ないし。

女 外行っちゃったのかしら。

男 ちよっと見えますね。

女 庭にいたらいいんだけど。

男、出ていく。

女もザッと片付けをして、すぐに男の後を追っていく。

息子 やめよろ、みつともない。

A だってここじゃないと、ここじゃないと、あの人捕まえられないじゃない。

息子 もうやめてくれよ、おかしいよ。人の家の前座り込んで、変な目で見られてるだろ。

A 今日こそ家に連れて帰るのよ、今日こそ、今日こそ。

息子 父さん来ないかもしれないだろ。

A 来るわ、絶対。絶対あの女と一緒に来るに決まってる。あの女と一緒に。

息子 頼むからやめてくれよ。なあ、母さん、そんなことして何になるんだよ。もういい

だろ。だから、父さんだって家逃げ出すんだよ。もういい加減にしてくれよ。

A だめよ、だめよだめ。待つの、待つの、待つの。待つのよ。待ってやるんだから。

息子 ……

A 連れて帰るんだから、連れて帰るんだから…

息子 勝手にしろよ。

息子、出ていく。

A 連れて帰るんだから、連れて、連れて…

男、道に出てくる。

男 直江さん。

A ……

女も道にやってくる。

男 直江さん。

A ……(泣き出す)

男、Aの近くに行く。

暗転。

SCENE・5

リビングで女が折り紙など、飾り付けたものを取っている。

B、C、Dは座っている。

女 お風呂どうします？もう沸いてますよ。

誰も返事をしない。

女 道子さん、お風呂にしませんか。お風呂。体洗ってくださいよう？

D . . .
女 温まりますよ。お風呂行きましょう。

D お風呂？ . . . ううん、いい、お風呂いい。

女 あらー、入らないの？道子さん、お風呂大好きなのに。前入ったのは三日位前や
ない？

D いい、お風呂いい。

女 幸代さんは？

B はい？

女 お風呂。

B まだなんちゃうの。

女 え？

B まだええやろ。

女 けど、もうお湯沸いてますよ。

B もう少し待っても。

女 でも、もう八時やし。頼子さんは？

C もう少しここにいる。

女 そう？なら、誰も入らへんの？

E が出てくる。

E お誕生会はもうお終いですか？

女 浜口さん、起きてたの？

E もうお終いですか？

女 そうなの、

E じゃあ、祝ってもらえないんですか？

女 浜口さんの誕生日？

E 朝になったんで、一つ年をとりました。

女 いくつになったの？

E 一つ年をとりました。

女 今日は、浜口さんの誕生日やないですよ。今日は前田さんの誕生日。ここで働いてる
前田さん。

E (Cに) 前田さん、前田さんですか？

C . . .

女 浜口さんの誕生日は先月でしょう？

E そうですね、前田さんでしたか。
誰？どの人？

女 前田さん？

C どの人？

女 それが、おらへんのよ。

C ふーん、

女 せっかくみんなで飾り付けしたのにねえ。どうしたんやろう。

E 僕の誕生日会じゃなかったんですか、なんだ、なんだ、

女 残念だったわね。

B 今からちやうんか。

女 今から？

B 今から来るんとちやうの。

女 今ね、森さんが前田さんの家まで行ってる。

E 今から来るんですね、その、誕生日の人。

女 今日、四時から来るはずやったのよ。だけど、何かあったんかなあ。電話とか連絡もないのよ。

B やから、今こっち向かってるんやろ。

女 どうしはったんやろうねえ。

D が、女が取った飾りで遊んでいる。

女 道子さん、道子さん。せっかく作ったんやから、そのままにしとかへん？また使えるし。

D また？また？

女 そう、今度道子さんのお誕生日の時にでもまた飾りましょうよ。

D いつ？いつ？いつなの？

女 道子さんの誕生日はいつだったけ？覚えてる？

D ん？ん？

女 誕生日。道子さんの誕生日は？

D 大正十一年五月十日。

女 そう、五月十日。よく覚えてたね。五月になったら道子さんのお誕生会しましょうね。

D 五月？五月か。じゃあ、まだまだ先だ。まだまだ先かあ。

女 今四月だから、もうすぐだよ。次が五月。

男 が帰って来る。

男 ただいま。

女 お帰り。どうやった？

男 うん、

B なあ、なあ、なあ、
女 何？

B お客さんは？お客さん。

男 お客さん？

B お客さん、連れて来るんやろ。お客さん。せやから、うちら待ってるんやから。

女 前田さんのこと？

B 飾り付けして待ってるんやから。

男 前田さん、やっぱり家にいなかった。

女 そうなの、

いつの間にか、Cが出ていつている。

B こうへんのか？こうへんの？

男 うん、

B なんや、お客さんこうへんのか、なんや、せつかく飾り付けまでして待っててやったのに。

B、出ていく。

男 車なかったから、どつか出かけてるのかもしれない。

女 家は？前田さんのお母さんはいた？

男 誰も出なかったから、一緒なんちゃうかなあ。電気もついてなかったし。

女 けど、いつもはお母さんが家にいるんでしょう、足悪くて。

男 車でどつか行ってるんかなあ。

E (折り紙のチェーンを飾ろうとしながら) これどうするんですか？ここでいいんですよね。

女 浜口さん、いいのよ。もう飾らないの。

E そうなんですか？

女 そうなの。今取ってるところなの。

E 取ってる？

女 そう、片付けてる途中。

E 飾ってもないのに、片付けるんですか？

女 さっきまで飾ってたのよ。

E そうだったんですか、すみません。

A が出てくる。

A どうしましょう、ねえ、どうしましょう。

男 どうしたんです？

A 部屋がね、部屋がね、分からなくなっちゃたの。

男 部屋ですか？
A そう、どうしましょう。
女 直江さん、自分の部屋にいたんじゃないの？
A いたのよ、いたの。自分の部屋に。けど・・・どうしましょう。
女 何か変わったの？
A 私の部屋じゃなくなっちゃったみたいなの。
男 一緒に行きましょうか。
A 教えて下さい。私の部屋はどこなんですか？
男 さあ、直江さんの部屋いきましようね。

Aと男、出ていく。

女 道子さん、そんなところで寝ると、風邪ひきますよ。
D 寒い、寒いかな、冬か、冬になるのか、
女 お風呂、ホンマに今日は入らないんですか？
D あれ、お布団がない。私のお布団がどっかいちゃった。あれ、あれ、
女 道子さんのお布団は部屋にありますよ。敷いてきましようか。
D お布団？お布団、敷ける。お布団、お布団は？
女 寝るんだったら、自分の部屋の方がいいですよ。
D お布団敷かないと。お父さんのお布団。お風呂上がる前に敷いてあげないと。
(Eに) もう出てきたの？まだなの、お布団、まだなの。どっかいちゃったみたいなの。
お布団、お布団。
E お風呂入れるんですか？
女 ええ、沸いてますよ。浜口さん、入りますか？
E はい、お風呂入りたいです。入ってもいいですか？
女 もちろん。良かった、せっかくお湯焚いたのに、誰も入ってくれなかったんですよ。
E 入らせてください。お風呂入ってきます。
D お風呂入ってきます？入ってくる？今から入るの？今からなのね、じゃあ、お布団敷きます。敷いておきます。
女 着替え準備しておきますから。どうぞ。
E ありがとうございます。
女 浜口さんが一番に入ると思わなかったから、ちょっとお湯熱いかもしれませんけど。
D お湯熱い？熱いの？熱いなら、お水足して。お水足して。
女 浜口さんは道子さんたちと違って、ぬるいお湯がいいんですよね。
D お水足して。いいの、私は。いいの、お水足して。
女 道子さん、お部屋のお布団敷いておいてくださいね。こんなところどうとうとしてると、本当に風邪ひきますよ。春といっても今日みたいな日はまだ寒いですから。浜口さんの後お風呂入るなら一緒に入りましよう。まずはお布団お願いしますね。

女とE、出ていく。

D お風呂？お布団？・・・お風呂？お布団？どっち？

C がマニキュアを持てるだけ持って出て行く。

D お布団？お布団、まずはお布団。お布団、ない、ない、敷いてあげないと。お父さんのお布団敷いてあげないと。お父さんのお布団。

奥の道に、Dの息子の嫁が出てくる。

嫁 お義母さん、お布団敷きましたから。

D お布団、あったの？

嫁 お部屋、すぐに寝れるようにしておきましたから。お風呂も入れますから。

D ・・・ありがとう。

嫁 疲れたんじゃないですか。

D 大丈夫。

嫁 眠ってたから。東京のお義兄さんからも電話ありましたよ、宜しく言って下さいって。

D そう・・・ここはやっぱり車の音響くわねえ、

嫁 国道沿いですから。もう一本入るとそれほどでもないんですけど。ここ買った時はもつと車の通りも少なかつたんですけどねえ。

D 仕方ないわね、便利のいいところだから。まあ、どこだって慣れてしまえばね。

嫁 ・・・お義母さん、前にもお話ししましたことなんですけど。

D なに？

嫁 こっちで暮らしたらどうかと思って。お義母さん一人じゃあ、あの家広すぎるですよ。

D 広すぎるってことありませんよ。

嫁 隆志さんも心配なんです。せめてもう少し近いといいんですけど、お義母さんの家とこことじゃかなり遠くて、なかなかあそこまでは行けませんし。それに、何かあってからじゃ遅いですから。

D 大丈夫、お父さんが、

嫁 もちろん、隆志さんの仕事もありますから、あの家には住めませんが、こことあちらを売って、新しい家を建てれば、お義母さんも安心なことありませんか？

D だけど、お父さんの家ですもの。

嫁 もう三年もたちましたし、先々のことを考えたらやっぱりお母さん一人だと、

D けど、お父さんが、

嫁 一人で暮らしてるから余計に寂しいってこと、あると思うんです。こっちだとお友達がいなくてもいいんですけど、私達がいまいますし。何より安心ですから。

D あそこにはお父さんがいますから。

嫁 お義母さん、お義父さんもう亡くなったんですよ。

D ・・・そうだ、お風呂、お風呂。

嫁 亡くなられたお義父さんのことより、お義母さんが心配なんですよ。

D お風呂、お風呂。

嫁 お風呂入ります？

D お風呂、お布団しかないと、お父さんのお布団、お布団

嫁 お布団は準備しましたから。

D あれ、お布団がない。どこだ？どこだ？ここどこだ？どうする？どうする？どうしよう。

嫁 お義母さん、お風呂場こっちですよ。じゃあ私、もう一回お湯あたたためなおしてきますね。

嫁、出ていく。

D 帰らなきゃ、おうち帰らなきゃ。おうち、おうち、どこだろおうち、おうちどこだろ。おうち、おうち……

D、トイレを探している。

電話が鳴る。電話の音に反応するD。

男がリビングを横切っていく。

D おうち帰らなきゃ、帰らなきゃおうち。

男を追いかけていくD。

Cが柱の方に歩いてくる。

男が電話の子機を持って出てくる。

男 ……はい、……ちょっと待って下さいね。(部屋の方を見る)今ちょっと近くに
はいないみたいで、……はい、……そうですが、何か？……ああ、警察の……
はい、……え？……事故ですか？……ああ、ええ、……病院で、……
ああ、……そうなんですか、……ああ、分かりました。……いえいえ……
はい、伝えておきます。……はい、……はい、……どうも……はい、
すみません……お願いします。

Cが柱の下の鉢植えにマニキュアを埋めている。

男、少しの間考えているが、子機を持って出ていく。

C 咲いた、咲いた、チューリップの花が、並んだ、並んだ、赤白黄色、どの花見ても綺麗だな、

Cの妹が、道に出てくる。

- 妹 姉さん、
- C (歌うのをやめる)
- 妹 姉さん。
- C 誰？
- 妹 私。
- C 誰？
- 妹 登志子です。
- C ・ ・ ・ としこ？
- 妹 元気だった？
- C 何の用？
- 妹 しばらく顔を見せてなかったでしょう。だから、姉さん元気にしてるかなと思って。久しぶりに寄らせてもらったんだけど。
- C いつものことじゃない。
- 妹 ・ ・ ・
- C だって、昔からそうでしょう？
- 妹 ・ ・ ・ そんなこと、
- C あなたが会いに来ることなんて、滅多になかったじゃない。
- 妹 来たいとは思ってるのよ、いつも。
- C ・ ・ ・ 何しにきたの？
- 妹 ああ、その、一応報告に。
- C 何？
- 妹 ほら、その、娘が結婚することになって。だから、知らせとこうかと。
- C 娘？
- 妹 ええ、千賀子が。
- C ちかこ？
- 妹 ええ。
- C ・ ・ ・ そうなの。
- 妹 来月結婚式で。だから、姉さんも来てもらえるかどうか聞きに。
- C ふーん、
- 妹 どう？
- C 分からないわ。
- 妹 そうよね、この人に一度聞いてみないとね。
- C ・ ・ ・
- 妹 ねえ、何埋めてたの？
- C え？
- 妹 何か埋めてたのかなって、ほら、姉さんよくいろんなもの埋めてたじゃない、小さい頃から。
- C そうだった？
- 妹 お気に入りのものを、人に取られないように隠すんだって言って。
- C ・ ・ ・

妹 私もよく、いろんなもの埋められた気がする。
C 登志子のもの？
妹 買ったばかりのリボンとか、好きな子にもらったべっこうの櫛とか、
C 私、そんなもの埋めないわよ。
妹 どっかになくしちゃったって初めはずっと思ってたんだけど。
C 埋めてない。
妹 今更、責めてるわけじゃないのよ。
C 埋めたことなんてない。
妹 ……
C 土に埋めるんだから、埋めるのは花の種や苗に決まってるでしょう。
妹 (埋められているものを覗きこむ)……マニキュア？
C、土を被せてしまおう。
C 苗よ。チューリップの苗。
妹 チューリップは球根でしょう？
C 苗もあるじゃない。
妹 ……でも、今のは、
C いろとりどりのね、花が咲くのよ。赤白黄色って。
妹 ……ねえ、この人、中にいるの？
C いないわよ。
妹 え、でも、
C いないでしょう。
妹 けど、そんなことって、
C だって、いないんだもの。
妹 でも、やっぱり誰かに聞いてみないと、
C え？
妹 ほら、外出できるかとか、
C 結婚式？
妹 ええ、
C 行かないわよ、私。
妹 ……
C 私、ここにいなきやいけないの。
妹 そうなの？
C ここで二人見ておかないといけないから。
妹 ……二人？
C だから、あなたたちで勝手にやって。
妹 ……姉さん、
C 何、
妹 私も一枝も他所に行っちゃったこと、

C
妹 ……
妹 ……やっぱりまだ怒ってるの？

C
いいの、

妹 お父さんとお母さん、姉さんに任せて。

C 私も勝手にさせてもらってるんだから、いいのよ、登志子たちも好きにしてくれたら。
結婚だって何だってしたらいいんだわ。

妹 ……

C 私はここにいるから。

妹 そう……また、千賀子連れて挨拶させに来ます。今日は突然でごめんなさい。

C ……

妹 ちよっとこの人、探してきますね。来たこと伝えてきます。

妹、出ていく。

C、しばらくそのままにいるが、やがて、土の中のマニキュアを一本出し、逆さまに突き刺す。

C ……ピンクのお墓。

リビングに、女と頭にタオルを巻いたパジャマ姿のEが出てくる。

C、出ていく。

E 僕にはね、その決定権がないわけなんですよ。向こうにいくのにもここにいるのも、僕自身が決められることじゃないってことなんです。

女 そうなの、

E だからですね、例えば、ああ、おいしいものを食べれて極楽だとか、ああ、お湯に浸かれて極楽だ、とかいうものをね、その、えっと、

女 タオル落ちそうですよ。

E ああ、すいません。

女 ちゃんと乾かしてから寝ましょうね。

E えっと、どこまで話しましたっけ？

女 おいしいものやお湯が極楽だとか、

E はい、それが重要なことなんですから。(椅子に座ろうとする)

女 ああ、駄目、まだ座らないでね。歯ブラシ探しに行くんですよ。

E え？

女 歯ブラシとりにいきましょうね。

E 歯ブラシですか？

女 そう、洗面所になかったでしょう？部屋のどこかなんじやない？

E ああ、けど、歯ブラシって歯ブラシなんでしょう？

女 ええ、

E 歯磨くところにあるものでしょう？

女 そうね、歯磨くための物だから。

E それが、部屋にないでしょう。

女 そう思うんだけど、でも、持って行ってるかもしれないでしょう。

E 僕は部屋で歯を磨いてるんですか？水もないのに。

女 一度、見るだけみてみましょう。

E そうですね、

女 ところで、何が重要なことなんでしたっけ。

E 何の話ですか？

女 さつき、向こうに行くのも決められないとか、

E ああ、なんでしたかねえ・・・忘れました。

C、出てくる。

女 ああ、頼子さん。トイレでも行ってたの？

E お先です。

女 頼子さんもお風呂にしますか？

C、座る。

女 すぐ戻ってくるので、お風呂の準備しておいてもらえます？

女とE、出ていく。

C、埋めたマニキュアを塗った爪を見ている。

男、出てくる。

男 あれ？どこ行っちゃったんだろう。

C あの人、

男 誰か来ませんでした？

C 来てない。お風呂出た人だけ。

男 ああ、浜口さん。そうか、じゃあ、どこなんだろう。

C あの人いないの？

男 あの人って？

C 人の布団で軋かく人。

男 直江さんですか？

C どこにいるの？

男 もう、自分の部屋戻りましたよ。

C ねえ、お布団持ってきて頂戴。

男 え？

C ここで寝るんです。お布団持ってきて下さいな。

男 そんな事言わないで下さいよ。直江さんだってわざと入ったわけじゃないんですよ。

自分の部屋だと思い込んでただけなんですから。

C 全然違うじゃない。なんで間違えるの。

男 頼子さん、鍵かけてなかったでしょう。直江さん、自分の部屋に鍵かけない人だから、開いてたからここだと思っちゃったんですよ。

C とにかく、ここで寝るの。

男 もう誰もいませんから、ゆつくり自分の部屋で寝て下さい。

C 嫌よ。だってまたあの人が入ってくるかもしれないじゃないの。私が寝てるところに入り込んでくるかもしれないじゃない。

男 大丈夫ですよ。直江さん、もう自分の部屋に戻って寝てますから。

C あの人、ちよつと頭おかしいから、また夜中に来るかも知れないでしょう。

男 そんなに心配なら、僕が外から鍵かけておきましょうか。そしたら誰も入れないでしょう。朝、頼子さんの起きる時間には鍵開けにきますから。

C そんな、あなた私を起こしに来るつもりなの？

男 部屋に入られるのが嫌なら、時間を決めて鍵だけ開けておきます。それならいいでしょう。扉を開けたりしませんから。

C

男 それでどうですか？朝何時がいいですか？七時ぐらいですか。

C 朝まで私を閉じこめるつもりなの？

男

C どうして中に鍵つけてくれないのよ。

男 なにかあったら困るじゃないですか。

C 私は大丈夫。

男 頼子さんは大丈夫かもしれませんが、他の方はね。

C じゃあ、私の部屋だけ鍵をつければいいでしょう、

男 そんなわけにはいきませんよ、ここはみんなの家なんですから。

C だからなに。

男 頼子さんだけ特別ってわけにはいかないんです。

D、出てくる。

D お父さんは？お父さん、

男 どうしたんです。

D いないの、お父さん、お風呂場にいないの。

男 浜口さんなら、お風呂上がったそうですよ。

D もう寝ちゃったの？大変、お布団敷いてないのに、大変。

女とE、出てくる。

女 あら、道子さん、こっちにいたの？

D お布団敷いてきます、お布団。

D、出ていく。

男 ああ、よかった。まだいたんですね。

女 どうかしたの？

男 電話がね、あつたんです。

女 いつ？

男 さっき、いや、少し前かな。だから探してたんです。

女 そうだったの、誰から？

男 その、警察から。

女 え？警察？

E 警察ですか？

男 なんか、この関係者の人が、病院にいるって、

女 この関係者？

男 事故らしくて、

女 誰？

男 また詳しいことは電話するって言っていました。

女 ……そう、

C 何かあつたのかしら。

E 誰が？

C ほら……

電話が鳴る。

女 ちよっと、出てくる。

C (Eに) ほら……

女、出ていく。

暗転。

SCENE・6

リビングに、男と女がいる。

男 みんな、僕を誰かと勘違いしてるんですよ。

女 そんなことないですよ。

男 そんなふうに見えることあるでしょう、この仕事やっていると。

女 そうですか？

男 みんないい人なんですよ、いい人なんですけど。年とるとあんなふうになるんですかねえ。年は取りたくないですよね。

女 森さん、

男 ただでさえ体力が落ちたり、物忘れが激しくなったりして、嫌だなあって思うことばかりなのに、あんなふうになっちゃうと尚更ね。やっぱり見ててつらくなることってありますし。

女 そんなことないわよ。

男 僕ね、一人っ子だったんです。うちの周りで一人っ子って僕の家だけで。隣の家に幼馴染がいて、いつも一緒に遊んでたんですけど、その子の家に大きい木があって、よく二人で登ってました。ふざけて、落ちちゃったこともあったなあ。頭切って大騒ぎになって。その子の家ってすごい大家族で、兄弟六人に、お父さんとお母さん、それにおじいちゃんおばあちゃんと、ひいじいさんひいばあさんまでいましてね、そのひいじいさんが本当元気な人で、よく怒鳴られたりしたなあ。けど、やっぱりボケちゃって。あるすごい暑い日、ふらふら歩いて歩いてたんですよ、うちの家の前を。白いのびきったシャツにびろびろのステテコはいて。夏休みか何かだったから昼寝してたんですけど、なんとなく目が覚めて。ひいじいさんだっけすぐ分かった。頭にシミがあるなあって思ってるうちに、そのままふらふら行っちゃって。それっきり、帰って来なかった。お葬式のととき、気づかなかつたんだから仕方がないねって、みんな話してました。

女 森さん、

男 ボケ老人だったから、一人で外出しちやいけないうんだったって知ってたんですけど、ひいじいさんすごく嬉しそうだったから。なかなか家から出してもらえてなかったみたいだし。

女 森さん。

男 僕しか見てなかったんですよ、そのひいじいさんが出ていくとこ。

女 森さん、そろそろ、

男 ねえ、そうですね、僕達が見てあげないとね。でもねえ、勘違いされてるっていうのはどうもなあ、やっぱりなあ、なんでっていう気になっちゃって。

女 分かりましたから。森さん、さっきの話なんですけど。

男 何でしたっけ。

女 前田さん、事故にあって。

男 そうでしたね、お通夜とかお葬式とか、もう決まってるんですよ。みんなで行った方が良いんですかねえ。けど、邪魔ですよ。あんなのぞろぞろやってきたら。ただの年寄りだもんなあ。

女 森さん、

男 あ、すみません、こんな言い方しちやいけないうんですよ、なんかちよつと疲れてて、ほら昨日、あんまり寝てないから、あれっ、誰でしたっけ？直江さんかな、頼子さんかな、ほら、いろいろ・・・。ホントに疲れてるんですよ。

女 昨日は前田さんのことがあったでしょう、いろいろバタバタしちやつたから。

男 そうですね、

女 ねえ、早く行った方が良いですよ、見当たらないからもう行ったのかと思ってたんですけど。

男 まだ大丈夫ですよ、まだ早いですよ、こんな時間だし。

女 森さん、亡くなったのは前田さんなんですよ。

男 僕だって平気じゃないですよ、悲しいですよ。でもね、ちよっと本当に疲れてて。

女 お疲れなのは分かるんです。

男 すいません、体力があまりなくて、

女 でも、森さん。

男 何ですか？

女 行ってもらわないと困るんです。

男 なんですか？

女 みんな待ってるんですよ。

男 待っている？

女 そうですよ。みんな森さんが来るのを待ってるんです。

男 なんです、みんなが僕を待ってるんですか？

女 ……森さん、

男 はい、

女 分かってますか？亡くなったのあなたの娘さんなんですよ。

男 ……？

女 今日はあなたの娘さんのお通夜なんです。

男 ……

女 だから、行きましょう。奥さんも心細いと思いますよ。

男 僕は結婚なんかしていません。

女 何言ってるんですか、

男 僕は独身ですよ。

女 親戚の方だって、来ていたじゃないですか。

男 だから、みんな僕を誰かと勘違いしてるんです。

女 とにかく、前田さんの顔だけでも見にいきましょうよ。

男 誰ですか？その前田さんって、

女 あなたの娘さんじゃないですか。

男 ここで働いている人じゃないですか。

女 そうですよ。ここで働いていたあなたの娘さんです。

男 じゃあ、僕の同僚ですね。

女 ……森さん、お願いですから、みんなのところへ行きましょう。顔を見たら少しは
思い出しますよ。

いつものまにか、奥の道に喪服を着た五人が立って、会話をしている。

いい天気で良かったですね。

ほんとに月がよく見えて。

こんなに晴れるなんて昨日の天気からは想像もつきませんでしたよ。たくさん人がみえてましたね。

知り合いの多い人でしたから。

あの人にお世話になった人って、いっぱいいるんでしょうね。

大きい事故だったそうじゃないですか、

家族の方が大変ですよ、事故だと、

そうですね、相手のほうは、

やっぱり亡くなったみたいですよ、

どっちが悪いとかっていうのはまだはっきりしないみたいですけど、

仕事で疲れてたのかもしれないですね、介護士されてるらしいじゃないですか。

じゃあ、それが原因で、

まだはつきりとは分からないですけどね、

こんな急に亡くなられるなんて思ってもみませんでした。

昨日が誕生日だったらしいじゃないですか。

幾つになるはずだったの？

四十四って、誰かが言っていました。

あら、まだこれからなのに。

お母さんと二人暮らししてたんでしょう。

離婚されて、家に戻っていたみたいですねえ。

お父様のお世話もしていたって。

少し痴呆が入ってるようなこと聞きましたけど、

ほら、その介護士の職場にいたそうですね、お父様も。

介護士さん？

いえ、される方。

お母さんもかなりのお年なんでしょう。

足が悪いつて聞いてましたけど、

あまり仲良くなかったんでしよう、その二人、

お父様が今のようになってるから、なんかそうらしいですねえ。

その事が、彼女の離婚の原因とか、

けど、彼女は偉いですよね、

本当。

娘さんが亡くなられて、お二人どうなるんでしょうかね、

本当にいい人を失いましたよ、

人って、いっとうなるか分からないものですねえ。

それにしても、本当いい月ですね。

綺麗な空ですね。

いつもより少し冷えるのがまた、そう感じさせるのかもしれないですね。

空気も澄んでて。

もうすぐ五月ですね。

暦の上では初夏ですから。

春も終わりですね。
終りですよ。

五人、森の中の道を歩き出す。

男 今は何時ですか？

女 九時すぎだと思います。

男 今は何日ですか？

女 森さん？

男 何月ですか？

女

男 何年ですか？

女 二〇〇一年の四月二十八日。

男 じゃあ、春なんですな。

女 昨日は、娘さんの四十四回目の誕生日だった日です。

男ここは何処ですか？

女 ここは、グループホームです。

男 グループホーム？

女 森さんが生活している家です。

男僕の家？

女 痴呆症の老人の方が共に暮らす家です。

男 何処ですか？

女

男 それは何処なんですか？

女

男 僕は幾つなんですか？

女 あなたは、

男 三十なんですか？四十なんですか？五十なんですか？それとも八十、九十なん
か？

女 八十一です。森さん、あなたは今年で八十一歳です。

男僕は誰なんですか？

女 森さん、

男 僕は何をしているのですか？

女

男 僕は一体何をしてきたのですか？

女

男 今まで何をしていたのです。

五人がリビングに上がってくる。

あの人、本当にあの人ですか？
あの人って？
あの、この、
散歩に連れていってくれる、
そう、少し太った、
似てたわね、
うん、似てた、
うりふたつね、
うん、うりふたつ。

女
人間です。

もしかして、本人だったりして、
本人って、その人ってこと、
まさか、
そうよね、まさかね、
だって、昨日もいたじゃない。
そうだった？
そうだったでしょう。
でも、最近見ないじゃない。
ああ、そういえば、
じゃあ、本人なのかしら、
でも、なんで、棺の中にいるのよ。
さあ、

女
私と同じ、人間です。

亡くなっちゃったとか、
死んだってこと？
だって、あれってお通夜でしょう、
みんなしんみりしてたもの、
泣いてる人もいたわね、
じゃあ、
そうよ、やっぱりお通夜だったのよ、
あら、やだ。全然知らずに行ってたわ。
どうして私達が呼ばれたの？
だから、
やっぱり、あの人ってこと？
あのぼっちゃりした女の人？
あの人死んだの？

そうなの？
それしか考えられないじゃない。

男、綾取りをはじめている。

女 記憶がなくなっても、森さん、あなたは前田さんのお父様なんです。

男 分かりません、

女 ……

男 分からないんです……分からないんですよ。

糸を持った五人が、糸の一部を話す相手に渡し、人間綾取りを始めていく。

A こんなことになる前に、こうなる前に一緒に住みましょうって言うていたんです。そう私も主人も言うていたんですよ。

D 私だって、姉さんには申し訳ないと思ってるんです。我が儘な人でしたが、本当に、一番我が儘だったのは、私と下の姉だったんです。だから、だから、姉さんには本当申し訳がなくて。

C 元気だった時の祖母のイメージがずっと離れなかったんです。だから、何も出来なくなっていく祖母を見てられなくて。今でも祖母がちゃんと片付けなさいって怒ってる顔ばかり浮かんで。せめて、もう少し優しくしてあげれば良かったと。

B スミレをね、父にあげようと、スミレ買ってたんです。母が好きだったスミレ。家に帰って来たとき、父が喜ぶかと。今じゃもう遅いんですけど。

E 父が向こうで待つてると信じるしかないですよ。生きてるときは遊び放題だった父ですが、一番愛してたのは、ずっと一緒だった母さんだったんだろうと。そう信じてます。だってねえ、それでも思わないと。

A お義母さん、本当にお義父さんのこと、愛してらっしゃたみたいで。お義父さんが泣くなかって三年もたって、まだこの家にはお義父さんがいるからって、家を離れたがらなかったんです。それが病気の兆候だとは、主人も私も全然気づきませんでした。

この会話中、男は綾取りをしながら、SCENE・1でなされていたしりとりを口にする。

男 線路、路面電車、屋根、猫、工事現場、バス停、椅子、スクーター、タクシー、小学校、裏口、駐車場、植え込み、溝、倉庫、公衆電話、忘れ物、上り坂、家族、草、散歩、ポスト、時計、行き止まり、陸橋、植木、記憶、車、回り道、地図、住み家、街路樹、夢、迷路、

糸は次々にかけられていき、絡み合い解けなくなっている。

最後に、男にも糸がかけられる。

「老人」。

男・・・迷っちゃったみたいです。

綾取りの中に入っていないのは、女だけ。

女 いいんですよ・・・もういいんですよ。

ゆっくりと暗転。

エピローグ

女が一人、綾取りをしながらSCENE・1の席に座っている。

女・・・駅から線路沿いに行きます。交番、病院、踏切、花屋と続きます。どうやらその花屋にある花は造花のようです。その先には本屋と定食屋があります。最近、泥棒が多いらしく、鍵をかけるよう促す看板がたっています。物騒な世の中になりました。空き地もあります。そこには毎日、大きくなれない大人の人がやってきます。そして、人の住まなくなった家の前を通ると、なくしていたはずの記憶が戻ってきたりもします。そのまま、道なりにゆるく小学校のほうに曲がり、誰かが歌う童謡の聞こえるほうに進みます。立ち止まりたくなったら、訳がなくても止まってみます。そのときすれ違った一人の若い女性の影に、自分の影を重ねることは出来ません。だからこそ、何を思っても許されてしまうのです。風がお好み焼き屋の匂いを運んできたなら、十字路は気が向いたら左折して、少しづつまいたりしながら、大きな家の高い塀の下を、仕方なく歩いていくと、上り坂にぶつかります。息が荒くならない程度に上ると、表札が出ています。家族がのんびり机を囲んでいるでしょう。何の話をしているのでしょうか。私はどこに腰を下ろしたらいいのでしょうか。それとも、まだ先へ帰るべきなのですか。もういいかいの返事がかえってくるまで。・・・もういいかい。

誰も返事をしない。

女 もういいかい。

奥の道から、喪服を着た六人(男、A、B、C、D、E)が歩いてくる。

六人 まあだだよ。
女 もういいかい。

六人 まあだだよ。

「もういいかい」「まあだだよ」が何回か繰り返される中、ゆっくりと暗転していき、暗転しきりで、

六人 もういいよ。

おしまい。